

キリスト者たちにとってのチベット仏教

―チベット語訳聖書の成立をめぐる―

伏見 英俊

一、はじめに

欧米人と日本仏教について議論したことのある日本人なら、誰しも経験することの一つに、仏教用語を欧米の言葉に翻訳して議論することの難しさがある。何故なら、そのような場合、常に相手の宗教的バックグラウンドへ配慮した翻訳が必要とされるからである。しかしながら、相手に理解可能な訳語を心がけると、その訳語が日本仏教の概念を的確に表現していなくとも、不本意ながらritualとかordinationといった横文字によって議論を継続せざるを得ない場合がある。かかる事例からもわかるように、異なった宗教的バックグラウンドを持つ者どうしが互いを理解し合うことは思ったほど容易なことではない。まして、海外布教という場面では、様々な困難があったものと予想される。明治以降、数多くの日本人が仏教の海外布教に携わってきたが、海外で彼らが遭遇した困難は、おそらく我々の想像を絶するものであったに違いない。今回の考察では、これとは全く逆の方向から―その方が仏教の特徴を捉えるためには、しばしば有効な場合が少なくないが―キリスト教宣教師による仏教国

チベットへの布教活動を取り上げ、チベット語訳聖書の編纂に尽力したキリスト者たちの海外伝道を見て行きたい。

周知のように、キリスト教の宣教師たちは世界各地で伝道活動を展開し、布教に必要な聖書の翻訳を様々な言葉について行なってきた。その結果、今日では二千を超える言語に聖書が翻訳されている。日本では、イエズス会宣教師によってキリスト教が伝えられ、一六一三年には日本語訳の新約聖書が出版されたという記録が残されている。⁽¹⁾ 実際、この時期に新約聖書全体が日本語へ翻訳されていたかどうかについては異論も多いが、当時既にキリスト教の教義を日本語へ移植する試みが組織的に為されていたことは、英語の「*Love*」に相当するポルトガル語「*Amor*」に対して「大切」という日本語を対応させていることで有名な『日葡辞書』の記述からも実証されている。⁽³⁾

仏教徒が大勢を占めるチベットもその例外ではなく、周辺諸国を経由してキリスト教宣教師たちがチベットを訪れている。十八世紀には、イエズス会のデシデリ神父（一六八四―一七三三）⁽⁴⁾ がラサを訪れ、仏教僧と深い交流があったとされる。特に、デシデリ神父がチベット仏教理解のためにツォンカパの『菩提道次第論』を研究していたことは、我々仏教徒にとっても極めて興味深い記録である。キリスト教宣教師によるチベット語への本格的な聖書翻訳は、カシミール北東部のラフルル地方と西チベットのラダック地方を舞台として、ドイツのプロテスタント系教団モラヴィア宣教団によって進められた。中でも、宣教団の一員ハインリッヒ・イエシュケ（一八一七―一八八三）は、聖書を翻訳するために『チベット語文法』と『チベット語辞典』を編纂して、旧約聖書の一部と新約聖書のほぼ全体の翻訳を試みたと言われる。⁽⁵⁾ イエシュケの死後、聖書の翻訳作業は他のメンバーによって引き継がれ、残りの部分もチベット語へ翻訳されて、その後、改訂を加えたものがチベット語訳聖書として

今日に伝えられている⁽⁶⁾。

聖書翻訳は、本来、キリスト教の教えを広めるために進められたものであったが、今日では、翻訳された聖書そのもの、あるいは語彙集を始めとする翻訳のための諸文献が、様々な言語研究上の資料を提供している場合も少なくない。例えば、ゴート人司教ウルフィラ（三一―三八二／三八三）によって翻訳されたゴート語聖書は、現存するほとんど唯一のゴート語テキストとして印欧語研究上必要不可欠の資料となっている⁽⁷⁾。かかる観点からすれば、我々が常日頃愛用しているイエシュケの『チベット語辞典』もまた、聖書翻訳の副産物としての言語資料の一つに過ぎないものであった。しかしながら、イエシュケの『チベット語辞典』を注意深く読めば、その中で、絶えず仏教とキリスト教の対比が宣教師の目から論じられていることに気づくであろう。筆者が、今回、チベット語への聖書翻訳を取り上げたのは、一度、この辺の事情を整理しておきたいと考えたからであった。しかも、チベット学研究に携わる者の一人として、聖書翻訳のために作られた『チベット語辞典』が、仏教文献解説のために今なお仏教研究者たちによって使われていることに、広い意味での福音が今日に伝わっているような気がしてならないからであった。確かに、このような考察によって、チベット語訳聖書の翻訳事情と十九世紀から二十世紀にかけての西洋人の仏教理解の一端を窺い知ることができるが、現存するチベット語訳聖書が聖書の思想をどれだけ忠実にチベット語に移植し得たかを確認する必要がある、厳密な文献研究としては、必ずしも問題がないわけではない。そうではあるが、キリスト者たちの布教活動には、我々仏教者も教えられることが多々あり、そういった意味では、聖書のチベット語訳への翻訳事情を辿ることも無意味ではないものと思われる。

チベット語への聖書翻訳については、欧米の研究者によって既に幾つかの研究が報告されている。特に、ラダック地方に於けるモラヴィア宣教団の活動については、イギリスのブレイ氏とドレスデン民族博物館のマイヤー

博士によつて報告されていて、本研究でも両氏の先行研究を参照しながらモラヴィア教会の海外布教を紹介した。

二、モラヴィア宣教団の西ヒマラヤ布教

聖書の翻訳事業は、キリスト教の海外布教の中で極めて重要な役割を担っていた。そこで、チベット語訳聖書の話始める前に、キリスト教宣教師の入蔵の歴史について少し触れておく必要がある。歴史上、チベットへ最初に足を踏み入れたキリスト教宣教師は、イエズス会のポルトガル人アンドラーデ神父（一五八〇～一六三四）であつた。彼は一六二四年、西チベットのツァプランを訪れ、一六二六年にはチベット最初のキリスト教会を設け、当地で一六三〇年まで活動が続けたとされる⁽⁸⁾。

その後、十八世紀にはフランシスコ派のカプチン修道士たちがラサを訪れ伝道活動を開始した。彼らの伝道成果は、聖書の部分訳を含むものがローマで公刊され今日に伝えられる⁽⁹⁾。一方、イエズス会のイタリア人宣教師デシデリ神父（一六八四～一七三三）もまたラサを訪れ、一七一六年から一七二一年までラサで活動が続けている。その間、彼はラモチエ僧院やセラ寺でカンギルやテンギルの典籍を読み、チベット仏教を学んだとされ、カプチン修道士フェリーチェにチベット仏教を教授する際には、ツォンカパの『菩提道次第論』をフェリーチェと共にイタリア語に翻訳したことも記録されている⁽¹¹⁾。デシデリ神父はチベット人たちが信仰の対象とする三宝について、かなり注意深く観察していたようで、その結果を報告書に記しているが、デシデリ自身がキリスト教の三位と仏教の三宝を対比的に捉えていたかどうかは必ずしも明らかではない⁽¹²⁾。

(一) モラヴィア教会の設立

デシデリたちのチベット布教は、まだ聖書全体の翻訳を伴うものではなかった。⁽¹³⁾ 伝道活動に必要な聖書の翻訳に本格的に取り組んだのは、ドイツのプロテスタント系教団モラヴィア教会であった。この教団の起源は、一四五七年ボヘミア地方で創設された宗教集団に溯るが、その後、三十年戦争（一六一八～一六四八）中には宗教弾圧という憂き目に遭っている。十八世紀に入り、この教団のドイツへ逃れたプロテスタント系難民グループが中心となり、一七二二年ツインツェンドルフ伯の支援を受け、チェコ国境近くの町ヘルンフートに装いも新たにモラヴィア教会（ヘルンフート同胞教会）を設立した。とりわけ、この教団の宣教師たちは、福音が全く伝えられていない地へ、積極的に布教へ出て行ったことで知られている。⁽¹⁴⁾

(二) ラフル及びラダックでの布教活動

この地方へ最初に派遣されたのは、エドワード・パーゲルとヴィルヘルム・ハイデ（一八二五～一九〇七）の二人の宣教師であった。彼らは、当初、ラダックでの布教を許されず、まず、カシミール北東部のラフル地方キエーロンに根拠地を求めて、一八五五年から伝道を開始した。⁽¹⁵⁾ 一八五七年には、この二人にドイツから新たに派遣されたハインリッヒ・イエシュケ（一八一七～一八八三）が合流して、布教活動に参加している。⁽¹⁶⁾ その後、一八八五年には同教会の宣教師フリードリッヒ・レズロープ（一八八九～）に対して、念願のラダック地方での布教活動が許され、同地方のレーを中心に伝道を展開して行くことになる。⁽¹⁷⁾

布教活動では、石版印刷した小冊子を用いてキリスト教の教えを広め、聖書のチベット語への翻訳も徐々に進められて行った。このチベット語訳聖書は、イエシュケを始めとする宣教師たちによるチベット語及び仏教研究

に基づき、キリスト教に改宗したチベット僧の助力を受けながら行なわれたとされる。また、彼らは布教活動の一環として、病院や学校の建設にも積極的に携わっていたことが知られ、彼らの創設した学校が現在も当地で教育を続けている⁽¹⁸⁾。しかしながら、初期の宣教活動ではあまり成果が上がらなかったようで、宣教師たちはその原因について、チベット仏教とキリスト教の間には大きな教義的な隔たりがあるために、チベット仏教に親しんだラダック人にはキリスト教の教義を理解するのが困難であつたと分析している⁽¹⁹⁾。

三、ハインリッヒ・アウグスト・イエシュケ（一八一七—一八八三）の海外布教

ハインリッヒ・イエシュケは、一八一七年五月十七日、モラヴィア教会の根拠地ヘルンフートに生まれる。彼の祖先ミヒヤエル・イエシュケもまたボヘミアからの難民で、モラヴィア教会の設立メンバーの一人であつた。ハインリッヒ・イエシュケの才能は早くから周囲に認められ、貧しい家庭に生まれたにも拘わらず、教団の援助によつて教団の運営する学校で教育を受けることができた。卒業（一八三七年）後は、教師として教団の学校で十九年間教壇に立つている。ところが、一八五六年、教団からキエーロン伝道施設の管理者就任を要請され、それまでの平穩な学究生活を離れ、同年ドイツを後にしてインドへ旅立つこととなつた⁽²⁰⁾。

イエシュケがキエーロンでの宣教師に選任された経緯は明らかではないが、彼の才能に対する教団内での高い評価が一つの理由であつたであろうことは想像に難くない。イエシュケの言語学者としての能力は、多くの逸話と共に今日に言い伝えられている。例えば、彼はインドに旅立つ前、既に十四カ国語に通じていたと言われ、その内の八カ国語（ドイツ語・英語・フランス語・ラテン語・ギリシア語・デンマーク語・ポーランド語・スラブ語）で日々の日記を付け、その他にヘブライ語・ペルシア語・アラブ語・サンスクリット語の知識を身に付けて

いたとされる⁽²¹⁾。当時、ヘルンフォートの教団関係者は、イエシュケより先にラフルに於ける伝道活動に着手していたパージェルとハイデの最初の報告書を受けて、布教を成功させるためにはチベット語の修得が一つの大きな課題であると認識するに至ったと言われている⁽²²⁾。この辺に、モラヴィア教会によるイエシュケ派遣の意図があったものと推測される。言語学の他に、イエシュケは植物学と音楽にも造詣が深かったと言われ、とりわけ植物学については、彼がラフル地方で見つけた七つのヒマラヤ植物に対して、イエシュケにちなんだ学名が付されている⁽²³⁾ことが知られている。

(二) 伝道活動

一八五七年イエシュケは、パージェルとハイデの二人の宣教師に合流し、その後、一八六八年に帰国するまでの十一年間、カシミール北東部のラフル地方を中心として伝道活動を続けることになる。その間、一八五九年には、ドイツから来た元教師のエミリー・ローゼンハウアーと結婚している⁽²⁴⁾。

十一年間に及ぶイエシュケの伝道活動の中で、特に注目しなければならないことは、聖書翻訳を目的とした多岐にわたるチベット語研究であった。イエシュケの時代には、既にチョーマの『チベット語辞典』が一八三四年に出版されていたが、聖書の翻訳という厳密な作業には必ずしも充分なものではなかった。そこで、イエシュケは聖書翻訳に必要なチベット語の語彙・文法研究を目指して、キリスト教に改宗したチベット僧ソナム・トプギエ⁽²⁵⁾を始めとするインフォーマントからチベット語の方言及び文語を学習した。イエシュケの着任したキエーロンは、チベットからの巡礼者たちが訪れる主要な巡礼ルートの一つであったため、イエシュケはこの町で、中央チベットやカム地方からの多くのチベット人と接触することができたとされる。例えば、一八五九年には、ラサ

から来たチベット僧が教団施設に滞在し、イエシュケのチベット語研究に協力している。キエーロンでのチベット語研究に加え、一八六四年と一八六五年には、ダージリンを訪れてラサ方言の知識をさらに深めたと伝えられる。このような研究の中でイエシュケは、とりわけ『ミラレパの十万頌』に親しんでいたとされ、このことは彼の『チベット語辞典』に多くの用例が収録されていることから理解される。我々は、イエシュケのこのような綿密な基礎研究の積み重ねによつてはじめて、聖書のチベット語訳が可能になったことを認識しなくてはならない。⁽²⁶⁾

イエシュケ自身の最初の翻訳は『聖書物語』のチベット語訳であつたとされ、一八五九年頃、教団内の印刷所で石版印刷によつて出版された。その後、彼は教理問答や教会史に加え、マルティン・ルター（一四八三―一五四六）の説教集からの抜粋をもチベット語に翻訳し、伝道活動を展開して行つた。そして、聖書に関しては、旧約聖書の一部（「出エジプト記」の半分と「創世記」）と「ヘブライ人への手紙」を除く新約聖書全体の翻訳を試みている。⁽²⁸⁾

このように、精力的にチベット語訳聖書と取り組んで来たイエシュケであつたが、その一方では、病氣によつてキエーロンでの翻訳活動を中断する運命にあつた。激しいリュウマチが彼を襲つて仕事の継続を困難なものとし、一八六八年には十一年間の伝道活動を終えて帰国を決意することになる。帰国の後も、療養の合間を縫つて聖書翻訳とチベット語辞典編纂の仕事が続けていたが、ついに一八八三年九月二十四日、生まれ故郷のヘルンフーートの町で帰らぬ人となる。死後、彼の偉業を讃えて、モラヴィア教会からイエシュケ訳のチベット語聖書の中から「マタイによる福音書」（二十五・十二）の言葉が贈られ、墓石に刻まれたといふ。⁽²⁹⁾

(二)『チベット語文法』と『チベット語辞典』の編纂

前述のようにイエシュケは、キエーロンへの赴任以来、多くのチベット人の協力により綿密なチベット語研究を展開して来たが、その最初の成果は、キエーロン到着後わずか七、八年で出版された『チベット語文法』(一八六五年)⁽³⁰⁾と『チベット語辞典』(一八六六年)⁽³¹⁾であった。そして、帰国後の一八七一年に、グナーダウでドイツ語の『チベット語辞典』⁽³²⁾が出版され、イエシュケの死の二年前(一八八一年)には、我々が今日用いる『チベット語辞典』⁽³³⁾がロンドンで公刊されている。また、改訂増補された『チベット語文法』⁽³⁴⁾は、イエシュケの没した一八八三年にロンドンで出版され今日に伝わる。その他、チベット人のためのヒンディー語とウルドゥー語の入門書が、一八六七年キエーロンで出版されている⁽³⁵⁾。

イエシュケは一八八一年版の『チベット語辞典』の序文で、辞典編纂の目的について、キリスト教の流布を容易にすることと促進すること、とりわけチベット語訳聖書のための準備をすることにあつたと明確に述べている⁽³⁶⁾。したがって、彼の『チベット語辞典』は、あくまでも聖書の翻訳過程に於ける副産物の一つに過ぎなかったことがわかる。しかしながら、イエシュケ辞典は、その後数多くの研究成果の齎された今日でも、チベット語研究には必要不可欠の文献の一つに数えられている。中でも彼の『チベット語辞典』⁽³⁷⁾の重要性は、異なつたチベット語方言の間の異同について、様々な例を挙げながら言及している点にある。このことは、後述するように聖書翻訳に口語を用いるべきか、それとも文語を用いるべきかの決断を迫られた時に、一つの判断材料となつたものと考えられる。今日では、中国から出版された『蔵漢大辞典』が多くのチベット語名詞をカバーするようになったが、イエシュケ辞典も植物名に関しては、彼自身植物学への造詣が深かつたため、かなり正確な記述が見受けられる。また、チベット語動詞の説明については、今日でも一つの学的な根拠となつている箇所が少なくないことを指摘

しておく必要がある。

聖書翻訳に関しては、時折ギリシア語を示しながら、キリスト教の教義を伝え得るチベット語を検討している点がいエシュケ辞典の一つの特徴である。特に、チベット語dkon mchog (三宝の意味での「宝」) についての説明が詳しく記述され、イエシュケ自身はdkon mchogをキリスト教の「神」に相当するチベット語として採用している。⁽³⁸⁾ 他に、チベット語thugs nyid (心性) がギリシア語pneuma hagion (聖霊)⁽³⁹⁾ に、同様にbrkyang shin (拷問用の木) がstauros (十字架) に相当すること等、チベット語とキリスト教の主要概念との対応関係が数多く記されている。

四、チベット語訳聖書の編纂と出版

前述のように、本格的なチベット語訳聖書の作成にはモラヴィア教会の宣教師たちが中心的な役割を担ってきた。中でも、ハインリッヒ・イエシュケは初期の翻訳活動に多大の貢献を齎し、彼の翻訳抜きには、今日のチベット語訳聖書を語れないと言っても過言ではない。一方、そんなイエシュケを悩まし続けたものは、翻訳に用いる言葉はチベット語の文語と口語のどちらが相応しいかという方法的な問題であった。この問題について、イエシュケ自身は、(一) 口語による翻訳は粗野なものと理解されかねないこと、(二) チベットの口語は各方言の間に大きな違いがあるため、口語で翻訳した場合、チベット全土で理解されるのが難しくなること、(三) 文語の方が内容的に高度な宗教的概念を表現するのに適していること等の理由から、最終的には、チベット語の文語を翻訳語として採用している。このイエシュケの基本方針は、ダーズリンで活動していた宣教師たちの批判を受けつつも、イエシュケの死後、旧約聖書の翻訳活動を続けたアウグスト・ヘルマン・フランケ(一八七〇—一九

(三〇)とヨーゼフ・ゲルガン(一八七八―一九四八)⁽⁴²⁾によって引き継がれて行く。聖書の翻訳語として文語を用いれば、教育を受けたチベット人には理解できるが、一般のチベット人には理解しにくいものとなる。一方、特定の方言に基づく口語を用いれば、チベット全土の人々に理解されるのが困難になる。この翻訳語をめぐるディレンマは、イエシュケの時代から今日に至るまで続く問題であり、幾度かのチベット語訳聖書の改訂作業も、実はこの問題に左右されて来たのであった。⁽⁴³⁾以下では、若干長くなるがチベット語訳聖書の編纂と出版の経緯をまとめて、キリスト者たちのチベット布教の歴史を辿って行きたい。

(二) 初期の翻訳と出版

・「キエーロン版新約聖書」

イエシュケは、十一年に及ぶ宣教活動の中で、旧約聖書の一部と新約聖書のほぼ全体をチベット語に翻訳している。その後、イエシュケと彼の後継者たちによるチベット語訳聖書は、一八六一年以降二十年近くの年月をかけて、所謂「キエーロン版」がラフル地方の町キエーロンの教団印刷施設で石版印刷によって出版されて行く。例えば、「対観福音書」が一八六一年頃に、新約聖書の中から「使徒行伝」が一八六二年に、そして、残りの新約聖書は一八六五年から一八七五年にかけて出版された。しかしながら、イエシュケ自身はキエーロン版をチベット語訳聖書の草稿本と考えていたようで、一八六八年の帰国後も『チベット語辞典』編纂の傍ら、キエーロン版聖書の改訂に取り組んでいたとされる。一八七五年には、イエシュケ訳の「ヨハネ文書」がドイツで出版されているが、これはモラヴィア教会にとって、ヨーロッパに於ける最初のチベット語訳聖書の出版物として極めて意義深いものであった。尚、これらの初期の出版物はすべて、長方形の一枚の紙に両面刷りしたチベットの伝統

的な印刷様式（ボーティ・スタイル）を用いて出版されている。⁽⁴⁴⁾

・「聖書協会版新約聖書」

チベット語訳聖書の出版の歴史を辿る上で注意しなければならないことは、チベット語訳聖書の出版計画は、モラヴィア教会だけの宣教活動としてではなく、一八〇四年に設立された聖書協会の財政支援を受けて進められて来たことである。事実、モラヴィア教会は既に一八五九年の時点で、将来的なチベット語訳聖書出版の可能性をめぐって聖書協会と接触しており、イエシュケ自身もまた一八六三年、チベット語訳聖書の問題点に関する書簡をモラヴィア教会経由で聖書協会に送付していることが知られている。その後、一八八一年に、聖書協会がイエシュケたちによる新約聖書全体のチベット語訳の出版に同意したのを受けて、イエシュケの『チベット語辞典』用に準備された活字を用いてベルリンで出版されることになった。ところが、その出版計画はイエシュケの病气等によって遅延を余儀なくされ、最初の聖書協会版新約聖書としては、イエシュケの没した一八八三年になって漸く「マタイによる福音書」が出版され、新約聖書の残りの部分が出版されたのは一八八五年のことであった。⁽⁴⁵⁾

(二) 二十世紀の出版計画

・「ゲーム／上海版新約聖書」

イエシュケたちの新約聖書に対して、ダーズリンで活動するスカンジナビア同盟教団の宣教師たちは、文語による翻訳スタイルは一般のチベット人にとってかなり理解しにくいものであるという批判的な見解を表明した。彼らの批判は聖書協会を動かし、改訂版編纂の要望が高まって行き、ヴィルヘルム・ハイデ、グラハム・ザント

ベルク、デヴィット・マクドナルドにスカンジナビア同盟教団の宣教師たちを加えた編纂メンバーが中心となつて改訂作業が進められることになった。この新約聖書改訂版の編纂作業は、ダーズリン近くのゲームで一八九八年から四年の歳月を費やして行なわれ、その結果は一九〇一年から一九〇三年にかけて十七分冊で出版された。尚、上述の編纂メンバーのうちハイデとザントベルクは、新約聖書の改訂作業の傍ら、チャンドラ・ダスの『チベット語辞典』草稿本の校正作業にも関わっていたことが知られている。⁽⁴⁶⁾その後、このゲーム版に多少訂正を加えて、上海でリプリントした上海版新約聖書が一九一三年と一九三三年に出版されている。⁽⁴⁷⁾しかしながら、ゲーム版新約聖書に対して、旧約聖書の翻訳に従事していたフランケを始めとするモラヴィア教会の宣教師たちは、チベット語文語と方言を混合したものに過ぎないと批判したとされる。かかる批判を反映して、チベット語文語を翻訳に用いるというイエシユケの基本方針が再び、旧約聖書の翻訳者たちによつて採用されて行くことになる。⁽⁴⁸⁾

・「旧約聖書のチベット語訳」

イエシユケが新約聖書をチベット語へ翻訳していた一方で、ハイデとレズロープの二人は、旧約聖書のチベット語訳を進めていた。その後、アウグスト・ヘルマン・フランケ（一八七〇―一九三〇）が旧約聖書翻訳を引き継ぎ、イエシユケの基本方針に従つて翻訳語としてチベットの口語ではなく平易な文語を採用している。フランケは、帰国後ベルリン大学でチベット学の教授として教壇に立つが（一九二五―一九三〇）、それ以前の一八九六年から第一次世界大戦までは、モラヴィア教会の宣教師としてラダック及びラフル地方で布教活動に参加し、旧約聖書のチベット語訳に於いて指導的立場にあつた。聖書の翻訳語に関するフランケの方針については、ゲーム版の編纂に参加したデヴィット・マクドナルドとの間でしばしば議論が繰り返されていたことが知られ、翻訳語の選択が極めて深刻な問題であつたことが理解される。フランケの帰国後、旧約聖書のチベット語訳は、彼の

協力者にして最初のラダック人牧師であつたヨーゼフ・ゲルガン（一八七八―一九四六）⁽⁴⁹⁾ によつて継続される。ゲルガンによる旧約聖書翻訳は一九三四年に完成し、幾つかの分冊が出版され始めたが、聖書教会はこの時点で、それ以上のチベット語訳聖書の出版の必要性を認めなかつたとされる。⁽⁵⁰⁾

・「一九四八年版聖書（新約・旧約）」

ヨーゼフ・ゲルガンは、旧約聖書のチベット語訳を進めると同時に、フランケの方針を継承しながら新約聖書の改訂作業にも取り組んでいた。そして、旧約と新約のチベット語訳聖書の出版を目指して、ゲルガンは義理の息子ツェタン・ブンツォク（一九〇八―一九七三）⁽⁵¹⁾ を始めとする四人の筆写担当者の協力を得て、出版用手書き原本の準備を始めた。その後、聖書協会はゲルガン訳の旧約聖書とゲルガン改訂の新約聖書を一冊にまとめた聖書の出版を認めたが、ゲルガンは出版完了を待たず一九四六年に他界してしまつたため、彼の死後はブンツォクが出版責任者を引き受け、一九四八年に新約と旧約を一冊にまとめたチベット語訳聖書が出版された。⁽⁵²⁾

・「一九七〇年版新約聖書」

最後のヨーロツパ人モラヴィア宣教師であつたピエール・ヴィトールは伝道活動を展開しながら、一九四八年版の新約聖書について、ギリシア語原典からではなく英語訳やウルドゥー語訳から翻訳されたと思われる部分の問題点などを憂慮していた。そこで彼は他の教団関係者とも連絡を取り、一九四八年版聖書に関わつたツェタン・ブンツォクと共に、一九六一年から新約聖書の改訂作業を開始することになる。その結果、インドの聖書協会によつて、一九六一年にバンガロールで「マタイによる福音書」が、続いて一九六六年に「ルカによる福音書」、一九六八年に「マルコによる福音書」「使徒行伝」がそれぞれ公刊され、一九七〇年には新約聖書全体の改訂版が出版された。⁽⁵³⁾

・「普及版聖書（新約・旧約）」

現在、日本聖書協会を通じて入手できるチベット語訳聖書（便宜上「普及版聖書」と呼ぶ）は、同書の書籍情報によれば、一九四八年版旧約聖書と一九六八年版新約聖書のリプリントであるとされる。⁽⁵⁴⁾ 旧約部分は手書きで、新約部分はチベット語活字を用いて印刷され、巻末にはチベット語表記の地名を載せた聖書関連地図が二枚付されている。また、「普及版聖書」の翻訳形式について一言付け加えれば、極端な意訳を避けるため、不十分な訳語には脚註を施すという聖書翻訳者の良心的な翻訳スタイルが踏襲されている点を指摘しておく必要がある。⁽⁵⁵⁾ チベット語訳聖書の訳語をめぐることは、フランケを始めとする研究者によって幾つかの考察が試みられており、それらの先行研究を基に、訳語の再検討が神学的立場を離れて可能な状況にある。厳密な文献研究としては解決されるべき問題も残されているが、チベット語訳聖書の語彙研究は、将来的には新しい『チベット語辞典』の編纂に欠くべからざる資料を提供してくれるものと思われる。

五、むすび

キリスト教の布教活動に用いられる聖書の原典は、今日でもなお、その正確な読みを後世に伝えるため、主として欧米の聖書研究者によって原典批評が繰り返され、数年に一度、原典の改訂版が出版されている。そして、そのような最新の聖書学の成果を参照しつつ、現代に最も相応しい訳語が再検討され、翻訳の改訂作業が世界的規模で行なわれている。翻訳改訂の頻度も決して低いものではなく、例えば、戦後の日本に限っただけでも数回の日本語訳の改訂版が出版されている。一方、仏教伝道協会による仏典翻訳活動も、仏教を世界に広めるためには極めて有益な事業であり、沼田恵範師の崇高なる理想に感服せずにはいられない。しかしながら、その規模に

ついては、世界中のキリスト教教会の支援の基に展開される聖書協会の事業とは比較することはできないであろう。

今日の日本では残念ながら、仏典に記述された「自然」「愛」「平等」などの言葉が、全くコンテキストを無視した形でジャーナリスティックに論じられる場面に遭遇することがある。このような現象は、仏典に現われた言葉と現代人の言語理解が必ずしも一致しないことに起因しているのであろうが、仏教者の一人として、仏典の言葉を現代人にわかりやすい言葉で伝えて来なかったことに対し反省せざるを得ず、改めて仏教伝道協会の偉大さを思い知らされた次第である。そういった状況を考えるにつけても、今回、キリスト者たちによる仏教国チベットへの布教活動を取り上げたことが、多少なりとも仏教の伝道活動の参考になればと思う。尚、今回の考察では、チベット語訳聖書の語彙研究が十分に報告できなかったが、それらの厳密な考証については別稿に於いて論じることにはしたい。

略記

Tibet Journal, vol. 16-4, pp. 28-58.

- Bray (1983a): "The Moravian Church in Ladakh: The First — (1994): "Towards a Tibetan Christianity?: The Lives of Forty Years 1885-1925," *Recent Research on Ladakh*, pp. 81-91. Joseph Gergan and Elyah Tsetan Phuntsog," *Tibetan Studies*, (1983b): "Heinrich August Jaeschke: Pioneer Tibetan Scholar," *The Tibet Journal*, vol. 8-1, pp. 50-55. vol. 1, pp. 68-80.
- (1990): "A History of the Moravian Church's Tibetan Bible — (1999): "August Hermann Francke's Letters from Ladakh 1896-1906," *Studia Tibetica et Mongolica*, pp. 17-36. *Translations*, "Wissenschaftsgeschichte und Gegenwartige Francke (1897): "Bemerkungen zu Jäschke's Tibetischer *Forschungen in Nordwest-Indien*, pp. 66-79. Bibelübersetzung," *ZDMG*, vol. 51, pp. 647-657.
- (1991): "Language, Tradition and the Tibetan Bible," *The Klatkowski (1983): "Towards the Complete History of the*

- Tibetan Bible - The Lord's Prayer in Different Translations," *Contributions on the Tibetan Language, History and Culture*, pp. 151-162.
- Meier (1990): "Heinrich August Jäschke - Person und Wissenschaftliche Wirksamkeit," *Wissenschaftsgeschichte und Gegenwärtige Forschungen in Nordwest-Indien*, pp. 15-27.
- (1997): "The Moravian Church's Educational Work in Lahul, Kinnaur and Ladakh 1856-1994," *Recent Research on Ladakh* 7, pp. 297-308.
- 註
- (1) 海老澤有道『日本の聖書』一九八九年、講談社、五八〇頁。
- (2) 田川建三『書物としての新約聖書』一九九七年、勁草書房、六一六―六一七頁。
- (3) 『杉本つとむ著作選集 4 増訂日本翻訳語史の研究』一九九八年、八坂書房、四六〇―四六一頁。ポルトガル語の *Amor* を日本語の「大切」に対応させている記述は、『日葡辞書』一九六〇年、岩波書店、四七五頁に見られる。
- (4) 薬師義美訳『チベットの報告 1』一九九一年、平凡社、一六四頁。尚、本格的はデシネリ研究書としては、ペテック教授監修の *GI Missionari Italiani nel Tibet e nel Nepal*, 7 vols., Roma, 1952-1956 がある。
- (5) Bray (1983b), p. 52.
- (6) Bray (1983a), pp. 86-88. モラヴィア教会以外にも幾つかのキリスト教系教団が、チベット周辺で布教活動を展開していたことが知られ、一九五九年のチベット動乱以降、インドあるいはネパールへ亡命した初期のチベット人たちに手を差し伸べたのも、実はチベット布教に取り組んできたキリスト者たちであったと言われる。『アジア・キリスト教の歴史』一九九一年、日本基督教団出版局、五五一頁参照。
- (7) 『言語学大辞典』第一巻、一九八八年、三省堂、一七二四頁。ゴート語訳聖書については、千種真一『ゴート語の聖書』一九八九年、大学書林に詳しい。印欧語族の中では、ドイツ語とゴート語が極めて近い関係にあるとされ、例えば、ゴート語訳聖書とルター訳聖書を比較すると、両者の比較言語学上の類似性がよくわかる。
- (8) 『チベットの報告 1』、三八―四七頁。
- (9) Antonio Georgi, *Alphabetum Tibetanum*, 1762, Roma. 同書については山口瑞鳳『チベット (上)』一九八七、東大出版会、四六―五二参照。
- (10) 『チベットの報告 1』、一五六―一六一頁。
- (11) 『チベットの報告 1』、一六四頁。
- (12) 薬師義美訳『チベットの報告 2』一九九二年、平凡社、八一―八六頁。
- (13) モラヴィア宣教団以前のチベット語訳聖書については、Kiafkowski (1983), pp. 153-154 参照。

- (14) Bray (1983a), p. 82. このBray氏の研究は、モラヴィア宣教団の伝道記録に基づいて、ラダック地方での同教団の活動をまとめたものである。
- (15) 二人の宣教師は、当初モンゴルへの布教を目指して一八五三年ドイツを出発し、翌年インドに到着した。しかしながら、三度にわたる入蔵失敗の後には、ラフル地方に伝道拠点を設置して、来たるべき日に備えたこととされる。Meier (1997), p. 297; Bray (1983b), p. 51参照。
- (16) Meier (1990), p. 15.
- (17) 当時、ラダック地方の町レーは、毎年何千人もの商人が行き来する交易の中心地であったため、宣教師たちはレーでの布教活動を切望していたとされる。Bray (1983a), p. 82参照。
- (18) Bray (1983a), pp. 83-85. ラダック地方では、多くの教団関係者がチフスで死亡しているが、このことは教団による病院施設運営など無縁ではなかったかもしれない。
- (19) Bray (1983a), pp. 88-89.
- (20) Bray (1983b), pp. 50-51.
- (21) Bray (1983b), p. 50.
- (22) Meier (1990), p. 15.
- (23) Bray (1983b), p. 53. 一方、Meier (1990), p. 15は六種の植物名についてのみ言及している。
- (24) このことについては、イエシュケを含めた三人の宣教師が教団本部に結婚を申請した結果、ドイツから三人の花嫁候補が送られたとされる。イエシュケは、その中の一人の女性と結婚している。Bray (1983b), pp. 51-52; Meier (1990), p. 16参照。
- (25) 一八六五年に、バプテスマを受けたチベット僧で、現地のモラヴィア教団に於ける最初の改宗者とされる。Bray (1983a), p. 82参照。
- (26) イエシュケの『ミラレバの十万頌』研究は、"Probe aus dem Tibetischen Legendenbuch, die Hunderttausend Gesänge des Milarapa." ZDMG, vol. 23, 1869, pp. 543-558に詳しい。
- (27) Bray (1983b), p. 52.
- (28) Bray (1983b), p. 52. 「ハプライ人への手紙」の部分は、ハイデ(キエロン)での最初の宣教師の一人)とレズロプ(レー)での布教活動が許された最初の宣教師)によって翻訳された。Bray (1990), p. 69参照。
- (29) Bray (1983b), p. 53.
- (30) *A Short Practical Grammar of the Tibetan Language*, 1865, Kyelang.
- (31) *Erstes Tibetisches Wörterbuch (für den Gebrauch in der Missionsstation)*, 1866, Kyelang.
- (32) *Handwörterbuch der Tibetischen Sprache*, 1871, Gadau. これは、一八八一年版の草稿本とも言ふべきもので、辞書部分は手書きされ、一般に語句の説明は一八八一年版より簡略である。今日でも入手可能。

- (33) *A Tibetan-English Dictionary*. 1881. London.
- (34) *Tibetan Grammar*. 1883. London.
- (35) *An Introduction to the Hindi and Urdu Languages for Tibetans*. 1867. Khyelang.
- (36) *A Tibetan-English Dictionary*. 1881. London. p. III.
- (37) *ibid.*, pp. XVI-XXI.
- (38) *ibid.*, pp. 10-11.
- (39) *ibid.*, p. 577. 1方' pneumonia (瘧) に対し'は' sems nyid が採用されている。
- (40) *ibid.*, p. 18.
- (41) フランケのラタタック地方を中心とした宣教活動については、Bray (1999) に詳しい。また、フランケのチベット学研究を取り扱ったものに Hartmut Walravens und Manfred Taube, *August Hermann Francke und die Westhimalaya-Mission der Herrnhuter Brüdergemeinde*. 1992がある。
- (42) 洗礼前のチベット名は' ソナム・ツェタン。ゲルガン (Gergan) という名は' 「先生」を意味するチベット語 dge rgan を音写したもので、父がバンチェンラマの先生だったことに由来するものと考えられる。ヨゼフ・ゲルガンの生涯については、Bray (1994), pp. 69-73参照。彼の父ンナム・ワンキェルは、キエーロンに於けるレスロープの旧約聖書翻訳作業の協力者の一人であった。Bray (1983a), p. 84; *do.* (1991), p. 38参照。
- (43) Bray (1990), pp. 66-67; *do.* (1991), pp. 29-31.
- (44) Bray (1990), p. 69; *do.* (1991), p. 35.
- (45) Bray (1990), pp. 67-69; *do.* (1991), pp. 35-36.
- (46) Sarat Chandra Das, *Tibetan-English Dictionary*. 1903. pp. v-xvi.
- (47) Klatkowski (1983), pp. 159-160によれば、' 「メタイによる福音書」(六・九〜十三)「ルカによる福音書」(十一・二〜四)に関して、ゲーム版と上海版との間の違いは全くないという。
- (48) Bray (1990), pp. 69-71; *do.* (1991), pp. 36-38.
- (49) ゲルガン訳旧約聖書の中から、' 「士師記」「ルツ記」「サムエル記(上・下)」が一九二四年に、' 「列王記(上)」「歴代志(下)」が一九三〇年に、そして「イザヤ記」「エレミヤ書」が一九三五年に出版されている。Bray (1990), p. 74参照。
- (50) Bray (1990), pp. 71-74; *do.* (1991), pp. 38-43.
- (51) ツェタン・ブンツォクの生涯については、Bray (1994), pp. 73-77参照。
- (52) Bray (1990), p. 74; *do.* (1991), pp. 43-44.
- (53) Bray (1990), p. 75; *do.* (1991), pp. 44-46.
- (54) *Zhal chad snga dnyi gnyis kyi mdo*, 'The Bible Society of India, Bangalore. 新約部分が一九六八年版のリプリントであるという書籍情報が印刷されているが、これは一九七〇年版であるいはそれと極めて類似の新約聖書のことを言っているものと考えられる。

- (55) チベット語訳聖書については、下記の箇所で訳語の問題が取り扱われている。Francke (1897), p. 653-657; Kłafowski (1983), pp. 157-162; Bray (1983b), p. 53; do. (1990), pp. 68-69; do. (1991), pp. 32-35. これらのうち、Kłafowski (1983) は、「メタイによる福音書」(六・九〜十三)と「ルカによる福音書」(十一・二〜四)に対する五つの異なつたチベット語訳を比較検討している。

付記

今回の考察で用いた『チベット語訳聖書(普及版)』は、東北大学でラテン語を講じておられる仙台北百合大学の宮崎正美先生の御高配によって入手することができました。また、モラヴィア宣教団に関する欧米文献の入手に際しては、ハンブルク大学のAlexander Schiller氏の手を煩わせました。記してここに感謝申し上げます。

〈キーワード〉 聖書、チベット、海外布教、モラヴィア教会、
イエシュケ